

「あの方はここにはおられない。かねて言われていたとおり、復活なさったのだ。」
(マタイによる福音書28:1-10)

イエス・キリストは十字架の上で死にました。十字架はローマ帝国の権力のしるしでした。そしてそれは同時に、人間の罪の象徴であり、悪の力の象徴でした。人びとは、イエス・キリストを「十字架につけろ！」と叫び、そして、神の子、イエス・キリストはその十字架につけられ、殺されました。誰もが、「これで終わった」と思いました。イエス・キリストを十字架につけた人びとも、イエス・キリストの弟子たちも、そして、婦人たちもです。彼女たちはどんな思いで十字架上のイエスを見つめたのでしょうか。もしかしたら、十字架上での奇跡を期待したかも知れません。しかし、主イエスは十字架の上で、無力なままに死んでしまうのです。

「わたしはあの方に確かに救われたのに」「何故あの正しい方が死ななければならなかったのか」…どうにもならない問いを繰り返したことでしょう。しかし、すべては終わってしまった。その絶望の中で、せめてただ起こしうる行動は、墓へ行き、遺体のそばに行くことだけでした。

しかし…墓に行ってみると大きな地震が起こります。そして天使が降ってきて、石をわきに転がしました。稲妻のように輝き、雪のように白い衣。明らかに天の使いです。番兵たちは恐ろしさのあまり、死体のようになってしまいました。婦人たちは天使たちが語るままに、急いで、しかし恐れつつ墓をのぞきこんだでしょう。そこに、主イエスの遺体はありませんでした。

「あの方はここにはおられない。かねて言われていたとおり、復活なさったのだ。」

死は、終わりではなかった。キリストの復活。それは、神がイエス・キリストをよみがえらせたということです。死は、神に勝てない。そして、十字架が人間の罪、悪霊の力の象徴であるならば、復活は、人間のたくらみ、罪、そして悪霊の力を神が打ち砕かれたということです。死をも支配する神は、どのような人間よりも、そしてどんなに強力な悪にも勝る。ローマの総督ポンテオ・ピラト、ヘロデ王、大祭司であろうと、そして「十字架につけろ！」と叫んだ群衆の渦巻く憎悪であろうと、神の前には無力であること、神が必ず勝利されること。それが明らかにされたのが、主イエス・キリストのご復活です。

死者の復活というだけなら、実はそれは、世界中の古い民話の中にいくつも見いだされる、ありきたりな話の一つでありました。しかし、わたしたちにとって大切なことは、他の誰かではなく、イエス・キリストが復活されたということなのです。主イエスは、人間の悪意、憎しみ、恨み、嫉妬…そうしたあらゆる悪、罪によって殺されました。その十字架上の姿は、今この世界の中で、いやまさにわたしたちの日常のどこかで、人間の思惑や憎悪、利己心の中で、今この時も虐待によって殺されていく子どもの姿であり、わたしたちが当たり前のように生きているこの社会における構造的な搾取、差別によって、飢えて死んでいく人びとの姿なのです。十字架上の主イエスの姿はその小さく弱くされた命。力を奪われた人びとの象徴です。神は、その主イエスをこそ復活させられました。神はこれによって、ご自分が主イエスの側、小さくされた命の側に立つことを明らかにされたのです。神は今、この時も虐待され、殺され、捨てられていく、弱く、小さな、力のない命の側にたたれる神なのです。その、主イエスを神は復活させられたのです。もうダメだ、の先があることを人間に教えるためです。弱くされ、力を奪われた命に、「大丈夫だ！」と、神はなんとしても希望の光をもたらしたかった。それが、主イエスのご復活です。だから、わたしたちはほかの誰でもない、主イエスのご復活をこそ祝うのです。そして、闇が支配しているかのように思えてしまうことすらあるこの世界で、小さくされた命に向かって、主イエスのご復活を告げ知らせるのです。

しかし、復活など、どうやって伝えればよいのでしょうか。今わたしたちが道端へ出て行って、「主はご復活された！」と宣言したところで、信じる人がいるのでしょうか。「復活だって？」と鼻で笑われるかもしれません。わたしたちは今日の福音で最初の宣教者の姿を見ました。それは、マグダラのマリア、もう一人のマリアです。彼女たちが使徒たちに、主イエスの復活という神の出来事を宣教したから、わたしたちに今も主イエスのご復活の福音が届けられているのです。宣教とは、彼女たち自身が経験した、復活を証しすることです。天使に促さえるまま、

彼女たちはガリラヤへと駆け出します。天使の言葉を聞いたとき、彼女たちの心は高鳴ったでしょう。「そうだ、あのお言葉は本当だったんだ。イエス様は言っていたではないか！三日目に復活するって！」高鳴る胸を抑えながら、彼女たちはガリラヤへと駆け出しました。そしてなんとその途中、主イエスに出会うのです。「おはよう。」この挨拶、なんと嬉しかったことでしょうか。毎日当たり前のように交わす挨拶です。しかし、もう二度と、主イエスと当たり前の朝など訪れない、挨拶などできないと思っていたのです。しかし、そうではありませんでした。「おはよう。」ここに、復活の主イエスとの再開が確かに実現しました。彼女たちがこのあと、弟子たちに伝えたのは、その「本当だ！」という思いです。ここに、言うなれば、彼女たちも復活したのです。死体のそばに行くことしかできなかった彼女たち、希望を失っていた彼女たちが、復活を証するものへとまったく変えられた。まさに彼女たち自身が復活の命に与った。この自分自身に起こった復活を伝えることこそ宣教です。主イエスは、この婦人たちを「ガリラヤへ行くように言いなさい」と、弟子たちのところへ遣わしました。彼女たちが最初の宣教者となったのです。

今日の福音のあとの箇所を読むと、彼女たちの話を聞いた使徒たちはガリラヤへと向かい、指示されていた山の上で、主イエスに出会ったこと、しかし、その中には疑うものもいた、と記されています。これがリアルな、現実的なリアクションではないでしょうか。復活など信じられようか。そんな事あるはずがないと疑っても不思議ではありません。しかし、主イエスはそんな弟子も含めて、ご自分の働きを担うようにと、彼らを弟子にしたときと同じように、彼らを召し出すのです。「あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。」と。これが有名な大宣教命令です。主イエスを裏切ってしまった彼らです。後悔。絶望。しかし、その彼らの命が、この命令と共に動き始めました。今、彼らもまた生き返ったのです。ご復活の主に出会い、イエス様の言っていたことは本当だったと身を持って知り、そして、徒言行録に記されているとおり、主イエスの復活をこの世界に宣言する宣教者となるのです。この命令を受けた弟子たちによって、福音は2000年後のわたしたちのもとにまで伝えられたのです。そしてそれは他でもない、「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」と言われた主イエスが共におられたからこそ、実現している事実です。

この出来事から2000年後の東京で、わたしたちは主イエスのご復活を祝います。この奇跡的な事実、現実こそ、女性たちに始まり、使徒たち、そして無数の「主イエスのみ言葉が本当だった。主イエスは復活なされた」ということを事実として経験した人々がいたということの証です。今、そのバトンはわたしたちに渡されています。主イエスの復活を「たわ言」で終わらせることもできます。しかし、はじめの宣教者となった女性たちが味わった、経験した喜びに、わたしたちも是非とも与ろうではありませんか。婦人たちがそうであったように、絶望の中で、この世の闇の中で、主イエスのみ言葉を思い出すとき、わたしたちもみ言葉から命をいただくことができるのです。身動きがとれないほどに恐れや後悔にとらわれていたとしても、弟子たちがそうであったように、み言葉に聴き、主の命令によって動き出すなら、復活の命が与えられます。そのご復活の命をいただいて、わたしたちも出かけましょう。そして宣言するのです。

ハレルヤ！主イエスはご復活された！もはや、死も悪も、絶対に勝利することはない。絶望にある人。あなたには必ず神からの光がある。もう生き直せない、立ち直れないと思っている人。あなたにも神からの新たな生命が与えられる！

主イエスの復活。それは絶望の先に必ず命が用意されていることをわたしたちに約束する出来事です。もう駄目だ、の先がある。大丈夫です。必ず神は勝利する。あなたの絶望に必ず光が灯される。イエス様が死んで、復活してくださって本当によかった。心からお祝いしましょう。イースターおめでとうございます。